

素人小説

第 21 回「リスクマネジメント」



株式会社 BSO

1 第21回「リスクマネジメント」

- ・ そうとも知らず鬱憤晴らし
- ・ 止まらない暴走
- ・ 仲下が勤めている会社
- ・ 地検の取り調べ
- ・ 二番手企業の妬み
- ・ テクノスター経営陣の逮捕
- ・ 仕掛けられていることに気づかす
- ・ リスクマネジメント
- ・ 大北の罫
- ・ システム電機の思惑とテクノスターの一体感
- ・ 仲下の暴走

「そうとも知らず鬱憤晴らし」

仲下は最近よく立ち寄る赤提灯の屋台で、今日もまた飲んでいた。社長の息子が会社に帰ってきてから、ことある毎に人前で叱責されたり出来が悪いと批判されたりで、面白くない日が多いのだ。気を紛らわせるために、つついこの飲み屋で一杯引っ掛け、横で飲んでいる、見知らぬ人に愚痴を言って家に帰るようになった。

仲下の隣で飲んでいる人はたいてい、話を聞いているかいないか、よく分からない態度でいるのだが、今日の隣にいる人は頷きながら聞いている。仲下は珍しくまともに相手にしてくれるので、つついこの饒舌になり、自分を重要視してくれていた社長が息子が、帰ってきてからは自分を軽んじていること、給料が上がらずボーナスが極端に少なくなったことなどまで話し出した。

「仲下が勤めている会社」

仲下の勤め先は、テクノスターと言い、現在の社長である富田がベンチャー企業として立ち上げた会社である。仲下が入社したのはちょうど会社が軌道に乗り始め、新卒採用を開始したときであった。

テクノスターは、デジタルネットワーク技術が広がり始めた頃、ネットワークに使う機

器を開発し、いち早く業界の中で名前が売れた。100名そこそこの会社ではあるが、業界の老舗ではトップ企業である。その後、この業界に様々な企業が乱立したが、このテクノスターを超える企業はまだ出て来ていない。小さい業界ではあるが、テクノスターはトップ企業として誰から見ても安定した経営が行われているように見えた。

「二番手企業の嫉み」

さて、二番手にとどまっているシステム機器とい会社はテクノスターの優秀な戦略に押されて、50名ほどの規模でモタモタした経営を余儀なくされ、依然低迷を続けている。

社長の金田と経営陣は、いままでテクノスターに追いつき追い越す戦略を考えてきたが、最近では考え方に変化が見られてきた。もはや正攻法では太刀打ちできない。どうやってテクノスターを打ちのめすか。

そのような矢先、最近中途採用で入ってきた大北は、テクノスター内部に混乱を巻き起こし弱体化させることを経営陣に具申した。何かの策を持っていそうな大北に、システム機器の経営陣は何をやるかを聞くことはせず、ただ暗黙の了解らしきものを与えた。

「仕掛けられていることに気づかず」

仲下が屋台で話している相手はこのシステム機器の大北であった。もちろん仲下は大北を知る由もない。

大北は、テクノスターの中核的な存在だった仲下が最近では軽視され、捨て鉢的な心境になっていることを知っていた。大北は仲下の生活を調べ、この屋台で飲んでいる事を掴んだ。

仲下は、自分の隣にいる人がテクノスターを陥れる戦略を企てているとも知らず、責任者としてやっていたプロジェクトの話をした。つつい贈収賄でやられるようなことまでしてきた自分なのにと話の口にした。頷きながら聞いていた大北は、これだと思い、ポツリと「内部告発したら」と独り言のように言った。仲下はその言葉に少しだけ気になって沈黙した。そして、「内部告発・・・」と無造作に呟いた。しかし、それからはその言葉に拘ることもなく、だらだたと愚痴を続けた。

「大北の罠」

大北は曲者である。執拗なまでに仲下が内部告発する心境になるように細工を仕掛けた。そして、その仕掛けに自身をもったのか、仲下を残し去っていった。それから大北がこの

飲み屋に現れることはなかった。

「仲下の暴走」

テクノスター社長の富田は息子が帰ってきてから、極力息子に中心的な動きをさせ、自分は後見人として一歩退いたような態度を取るようになっていた。

部課長会議の席で、仲下は自分のグループの業績の伸びが悪いことで息子に無能者呼ばわりされた。仲下は無言を通した。発言すると暴走してしまうことを自分でも分かっていたからだ。

仲下は会議が終わるや、いつもの時間より早く会社を後にした。まだ暗くなりかけの時刻ではあったが、例の屋台に直行した。立て続けに冷酒をコップで3杯飲んだ。しかし、気持ちは収まるどころか、ますます腹が立ってきた。まだ客は誰も来ておらず、いつものように愚痴を聞いてくれるような相手はいなかった。

いつか隣で愚痴を聞いてくれた人を思い出した。彼が呟いた「内部告発」という言葉を思い出した。

「内部告発用のホームページがあるよ。」

そのとき彼がポツリ言っていた言葉が一つひとつ思い出されてきた。

もはや自分の気持ちを制御できる状態ではなかった。家のパソコンを開き、ホームページへアクセスし、鬱憤晴らしのようにキーボードを叩いた。後になってこの行為がどういうことになるのかを知らずにである。

「止まらない暴走」

翌日、興奮が冷めないままに出勤した。周囲には何の変化もない。その変化のなさにもた腹が立った。頭痛がすると言い、昼前に退社した。帰るとき、2、3人の部下や同僚から、「仲下さんが早退するなんて入社以来初めてではないですか」と声をかけられた。その掛け声にまた腹が立った。仲下が自分でもおかしい顔付きになっているとは思ったが、それに気付く者はいなかった。(皆あまり他人のことに関心なんか持っていないのだ。最近、自分は社長の受けが悪くなっていることで、巻き添えになりたくない。自分から離れていきたいのだろう。．．．) そう思うことで、また腹が立った。

家に帰り、また内部告発のホームページを開いた。言いたいことが沢山ある。いくら言

っても足りない。あること無いこと連ねていくうちに、叩くのが嫌になってそのまま寝てしまった。

「地検の取り調べ」

それから2、3日すると社長や息子の様子がおかしくなった。仲下を見る目に明らかに嫌悪感がある。何か情報が伝わったようだ。

仲下が地検の取り調べを受けるようになったのは、それから数日経った夕方だった。最初は参考人として呼ばれたので、気楽な気分で地検に赴いた。しかし、担当官から質問を受けるにつれ、自分がどれほどのことを仕出かしたのか認識するようになってきた。

ホームページの発言欄に書いたことを一つずつ確認し、徹底的に明確にしていく。仲下は、いかにいい加減な事を言っていたかを思い知らされた。取り調べは一日で終わることはなく、何日も続いた。仲下は無責任な言動が犯罪であることを知った。しかし、もう遅い。自分のしたことの償いを嫌でもしなければならぬのだ。

「テクノスター経営陣の逮捕」

仲下の取り調べで、テクノスターの企業運営でいくつかの犯罪容疑が出てきた。経営陣の事情聴取が数ヶ月続き、家宅捜索が行われることになった。

経営陣には罪を犯したという認識はなかった。いくつかの問題点があることは知っていたが、それは解釈の違いであり、犯罪になるとは思っていなかった。税務調査でも毎回そうだった。仲下のいい加減な告発で無理やりに捜査されることになり、迷惑千番のこととして捉え、地検の捜査を適当に済ませようとした。この態度に硬化したのか、地検は問題点の立件を執拗に行い出した。また、疑義が残る案件についても立件に向かって執拗な捜査を行うようになった。

テクノスターの経営陣は、もはや簡単にはすまないことを覚悟し、顧問弁護士と契約した。顧問弁護士は、地検が執拗すぎる態度に不思議に思いながら、内容を調べてそんなに大きな問題ではないという認識をもった。

そのような矢先、地検は社長の富田をはじめとする経営陣のうち4名と実務責任者2名を逮捕した。全国紙に掲載され、大きく報道された。拘留期間は21日間。テクノスターの経営陣は隔離される状態になった。

「混乱」

関係先は突然のことで戸惑いを隠せず、電話は仕切りなしに掛かり、事情を確認する人の訪問が後を絶たなかった。残った幹部連中も地検が何かを調べていることは知っていたが、事情はほとんど知らされていなかった。どのように対応してよいのかも分からず、右往左往するのみであった。逮捕された経営陣との連絡も弁護士経由では要領を得ない。

「リスクマネジメント」

逮捕当日、課長クラス以上で対策会議が開かれた。経営陣が不在の中での討議がなされた。まず、逮捕者の現在抱えている仕事をリストアップし、その内容と進捗状況、それぞれの問題についての対応などについて確認と討議がなされた。

その結果、総務部長の飯田が社長代行をすること、息子の専務の仕事はそれぞれ関係部署の各課長がそれぞれの責任で対応すること、財務担当の役員の仕事は財務課長が役員の権限と責任もって行うこと、営業部長の仕事は、第1、3営業課長で分担対応すること、逮捕された営業2課長の仕事は、第1課長が兼任する。また、逮捕された開発部次長の仕事は技術部長が兼任する。

仕入先については、取引銀行の幹部にも同席してもらった上で従来どおりの支払いが出

来ることを説明した。また得意先には早急に説明会を開き、商品を含めてどおりに安定供給できること、今回の不祥事については状況が分かり次第説明することなどを手分けして開示していくことを申し合わせた。

また、今後の経営体制については逮捕されている経営陣の意向を尊重しながら、中長期の企業再構築と併行して幹部社員を中心に討議して決めることとした。

「システム機器の思惑とテクノスターの一体感」

この混乱に乗じシステム機器は、テクノスターの供給不安が予測されることや開発が弱体化しカスタマイズ対応が悪くなるだろうと触れ回り、テクノスターの得意先へ攻撃をかけていった。しかしその攻撃も、「しつけが良い、お客の身になってくれる、真面目」などといった常日頃のテクノスターの社員の対応の良さには通じなかった。

テクノスターの得意先には、「あの会社があんなことをする筈がない」、「告発した社員は余程変な人間だったのだろう」、「テクノスターは犠牲者だ」などと好意を持ってくれる人々が多く、「何か手伝えることがあったら言ってください」という人まで出てくる始末であった。得意先や仕入先はもちろん、関係者に好意・好感を持ってもらえるような経営姿勢のテクノスターは、システム機器の意趣をはね返す結果になった。

11 第21回「リスクマネジメント」

日頃から理念に基づいて考働し、トラブルがあっても残った幹部や役付者が理念に基づき対応したことが、結局は企業の存続の大きな要因になったと、この事件を見ていたある人の思いがあった。

おわり